第三巻

言語と表現

有精堂

萬葉集講座　第三巻
言語と表現
昭和四十八年七月一日発行
監修者　久松潜一
発行者　山崎誠
印刷所　株式会社文弘社
東京都千代田区神田神保町一―三九
発行所　有精堂出版株式会社
電話〇三(二九一)一五二一番
振替口座　東京四〇六八四番
郵便番号　一〇一
3392―550813―8610
◇乱丁・落丁はおとりかえいたします。

目次

万葉時代の言語生活　西宮一民　一

万葉人の言語観と和歌観　北山正廸　三六

万葉人と言霊　伊藤博　四六

万葉人の美意識と言語　杉山康彦　六四

万葉集の心と物　鈴木日出男　八六

万葉的表現　塚原鉄雄　一〇六
万葉集と散文　蔵中進　一二五
万葉集の文字意識　井手至　一四四
万葉集の音韻　馬淵和夫　一六一
万葉集の語法　鶴久　一八七
万葉集の語彙　春日和男　二一四
万葉集の方言　浅見徹　二四〇
万葉集の枕詞　増井元　二七〇
万葉集の序詞　土橋寛　二九一
万葉集の修辞　森重敏　三一一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

万葉集の待遇表現　蜂矢宣朗　三四〇
万葉集の場と表現　久米常民　三五九
万葉人と歌学び　太田善麿　三六〇

万葉時代の言語生活

西宮一民

序にかえて

「万葉時代」とは、ここでは大和時代から奈良時代末までの、いわゆる「上代」を指すとしておく。「言語生活」とは、「言語行為（話す・書く、聞く・読む）を伴う人間生活」をいうとしておく。「話す・聞く」は音声を媒材とした言語行為であり、「書く・読む」は文字を媒材とした言語行為である。前者は口頭言語の生活を形成し、後者は文字言語の生活を形成する。これらの生活は、人間生活の中で甚だ実用的な面を担っているが、また文学的な面も含まれているのである。

さて、万葉時代の言語生活について研究する場合、資料はすべて、文字とその関係のものばかりという制限がある。従って、口頭言語の生活については、形骸化した文字資料に息を吹きこむことによってのみ考察が可能となる。資料といえば、金石文以下記紀万葉風土記また祝詞宣命正倉院文書あるいは木簡などを指し、補助資料として紙筆硯墨などの筆記用具や鐘鼓烽火などの言語伝達道具が考えられる。

いまこれらの資料性について概略述べれば、金石文は文字に接した初期の言語生活の一端を窺うに足り、古事記は口承的言語生活の素地を見究める上に重要な資料となり、日本書紀は漢文体の選択による文字言語の精華を示すものとして価値があり、万葉集はそれ自体が文学的言語生活資料であると同時に、口頭・文字両面の言語生活資料を多く含有しており、一等資料となすことができる。風土記はやや

特殊ながら、風俗的に言語生活とかかわりのある記事もみられ、祝詞・宣命は神や天皇との関係における特異な言語生活があり、正倉院文書や出土木簡類には生活に密着した記録がみられ、当時の人間の息づかいが蘇ってくることもある。

ここで、従来の研究を顧るならば、実はその数は寥々たるもので、それがまた国語学の中で開拓の最も遅れている分野であることを示している。しかし、その先鞭となる池上禎造氏の「万葉人の言語生活」（『万葉集大成』3所収、昭和三〇・五）は極めて示唆に富むものであり、近年の橋本四郎氏の「古代の言語生活」（『講座国語史』6所収、昭和四七・二）はその体系的史的記述を図ろうとした力作であって、この二篇は、この種の研究論文の数の少なさを克服し、なお高度の水準を保つものといえよう。

前者の論文の中ではじめて指摘されたことを少しだけ紹介しておこう。万葉集の中で、口頭による言語行為を表わす語としては、イフ・ツグ・カタル・ノル・マヲス・トフ・タヅヌなどと多いが、それを受けるのはキク一語である。イフは発言一般を指し、ツグは伝達に重点をおく意味をもち、カタルは一まとまりの話、ノルは呪力をもった発言、トフは問う・訪うの意、タヅヌは道などを尋ねるの意。マヲス・マウスは散文に多く、イフの謙称。それに対するキクはキコユと同じく単に聴覚活動を表わし、キクが「聴従」の意（巻三、三六九）や「問う」の意（巻一、一）に用いられたのは極めて珍しい。

さらに、文字による言語行為を表わす語は甚だしく少なく、カク・シルス、ヨムの三語であるが、それらの意味は「書記」とか「読書」とかではなく、多分に語源的な「掻く」「印をつける」「数える」といった意味が活きていた。例えば「絵にかきとらむ」（巻二十、四三二七）は文字ではなく「画く」意であり、「豊の年しるす」（巻十七、三九二五）は「徴候」の意であり、「月日を数み」（巻四、五一〇）は表記通[illegible]意である。もし今日的な意味に用いられるとすれば、「水の上に数かく」（巻十一、二四三三）の如き外来の

成語を踏まえるか、「わが恋力記集め功に申さば五位の冠」（巻十六、三八五八）の如き漢語を交えた特殊な場合である。尤も「万代に記しつがむ」（巻十九、四二五四）は明らかに書記行為を思わせる唯一の例（大伴家持の歌）で、昔から「語りつがむ」といったもの。またヨムに「読」の意をもつ歌[illegible]も無いが、「読経」（天平九年但馬国正税帳に傍書「欲」とあるのはヨムのヨを表わす）をはじめとして、当時すでに書物も多かったのだから、「読」の意のヨムも存在していたと考えてよい。とはいえ、一般庶民にとっては文字による言語生活は甚だしく縁の薄いものであった。

このような指摘をはじめ、当時の言語生活万般にわたる問題提起がなされているのである。後者の橋本論文は、この前者の問題提起の一つでもある「言語観」に深い洞察の眼を向け、また古代（ここでは平安時代を含めている）の言語生活について記述すべき項目を敷設し、それを史的な流れにおいて捉えようとしたもので、その労は多大であり、その内容は説得力をもち、かつ挿絵は理解を助けてくれる。ここではその紹介をすることは割愛し、拙稿の随所において裨益するところがあったことを記しておくに止める。

ここにおいて、私の本題に対する考察の方針について述べよう。一つには、「万葉時代」を共時論的に扱おうと考える。人間が言語でものごとを考えるようになってから、先ず口頭言語による生活が始ったのであり、それは今日まで続いている。後、文字が伝播してから、主として五世紀以後、文字言語による生活が加わって二本立となる。万葉時代はこの二本立の時代であり、原始時代や平安時代に対する時代として、ほぼ一括同時代の言語と看做してよいと考えられるからである。二つには、文献『万葉集』を一等資料にしたいと考える。これについては資料性の所で略述したが、さらに、万葉集には案外になまの口頭言語的な歌、いわば「ただごと」のような歌が含まれており、また文字言語としてみても、公

の晴に対する私の褻の位置にあるものと認められ、しかも資料的な量においても抜群であるからである。

かくして、万葉集を主たる資料として、共時論的に扱うという方針が立つと、おのずからその結果を「記述する」という方向が定まる。そこで、「記述」上の構想を立てておこう。

第一に、「言語の伝達面よりみた言語生活」について記述しようと思う。言語の重要な機能は伝達にある。一人の人間がもう一人の人間に対し、あるいは特定多数の人間に対し、あるいは不特定の大衆に対し、口頭言語によるか文字言語によるかの何れかで、自己の思想を伝達し、受手はそれを理解しようとする。そこに、伝達を旨とする言語生活が営まれるのである。いま、西尾実氏の、通じあいとしての言語の形態と関係の表（岩波新書『日本人のことば』昭和三二・二、二七ページ）を少し歪曲して示せば、上図のようになる。これが、万葉時代では果してどういう実情にあったかについて記述しようと思う。次いで、伝達の手段や道具についても、また無筆の人（文盲）への伝達についても述べようと思う。

対人関係	口頭言語	文字言語
一対一	対話・問答	通信
一対多	会話・討議	記録・報告
一対衆	独話・演説	通達

第二に、「言語の位相面よりみた言語生活」について記述しようと思う。言語生活は社会的な人間関係において営まれる。そこでは、性別・年齢差・職種・階級別による言語差を生じている。次に地域差によって、方言も生じている。さらに、語自体に、よしあし・新古・雅俗といった価値観も生じ、文字自体にも、漢字と仮名・字体・字の排列といった価値観を生じている。これらを「言語の位相」という項目に一括して記述しようと思う。

第三に、「言語の教育面よりみた言語生活」について記述しようと思う。人間生れ落ちてから、言語は自然に具わっているものではなく、習得さるべきものなのである。従って、広義の教育が行われなく

てはならない。教育施設は限られていたとすると、一般庶民の言語教育はどうして行われていたのか、あるいは識字層の言語練磨の実態はどうかなどについてできる限り記述しようと思う。

記述上の構想は以上の三項とするが、すべてを記すことは紙面が許さない。勢い重点的に記さざるを得ないが、しかし、前記二論文との重複はつとめて避けるという意味をもつ「重点的」であることを断っておく。

一　伝達面よりみた言語生活

1　口頭言語による伝達の形態

(一)　対話。一対一の関係においてなされるもので、最もふつうの形態である。

(イ)みこもかる信濃の真弓わがひかばうま人さびていなといはむかも　（巻二、九六　久米禅師）
　みこもかる信濃の真弓ひかずして強ひさるわざを知るといはなくに　（巻二、九七　石川郎女）

(ロ)難波潟潮干に出でて玉藻刈るあま乙女ども汝が名告らさね　（巻九、一七二六　丹比真人）
　あさりする人とを見ませ草枕旅ゆく人にわが名は教らじ　（巻九、一七二七）

(ハ)寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼給りてその子生まはむ　（巻十六、三八四〇　池田朝臣）
　仏造る真朱足らずは水渟る池田の朝臣が鼻の上をほれ　（巻十六、三八四一　大神朝臣）

右の例が、当時の口頭言語そのままであるとはいわない。何故なら、日常の対話がこのような定型を以て行われるはずもなく、傍線部を見てもわかるように、発話の文は大抵は短いのがふつうであったろう。お互いに了解事項が多ければ多くを話す必要が無いからである。しかし、ともかく、右の諸例は定型に拘泥しなければ、やはり言語の性質としては口頭言語的といえようし、各々二首ずつ対になってい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

るから、対話の形態を把握することも可能である。

(イ)では、久米禅師が石川郎女に対し求愛の発話をし、それに対して石川郎女が禅師の上句をそのまま使って、うまくはぐらかす内容の発話をしたもの。当時「歌垣」（「嬥歌」とも）というのがあって、春や秋に多くの男女が山に登り歌舞して婚約をする行事をいうが、ここでの歌は男女のかけあいであり、歌による対話である。袁祁命（後の顕宗天皇）と志毘臣とが歌垣で大魚という乙女を争うとき、相手の歌のことばじりをとらえて話題を展開させ、相手を言いまかすまで続けられる話（清寧記）があり、常陸風土記には「郎子歌曰……嬢子報歌曰……」（香島郡童女松原の条）とあり、万葉集にも「吾が妻に他も言問へ」（巻九、一七五九）とある。この「言問」の実質は歌による対話を指す。結婚という人間生活の中の重大事が歌によって左右されたことは、歌による言語生活の重要さを物語るものといえよう。

(ロ)は丹比真人があま乙女に「名告り」を要求して、乙女がそれを拒絶した内容である。人の名はその人そのものという、いわゆる「言霊」の思想があって、特に女性は決しておのれの名を男性に告げることはなかった。人名がすでにタブーに属するものであって、「勿告りそ」といわれ、それを破れば結婚許諾を意味した。国名を問われて告れば、その問者の支配下に入るというのも同じ思想である。

(ハ)は大神朝臣の痩身と池田朝臣の赤鼻と、お互いの身体的特徴を捉えて悪口罵言を浴せかけたもの。

右の諸例は、二人の対話が対等に機智に溢れてなされたものである。そして、特に(イ)の如く、二人が同じ言葉を交わす点は、伝達を旨とする対話の、一つの儀礼的な発想に基くものと考えられる。その極端な例は、古事記上の、

イザナミの命「あなにやし、えをとこを」
イザナキの命「あなにやし、えをとめを」

である。後に、かかる形式は挨拶の言葉として固定してゆくこととなる。

(一)問答。これも一対一の関係においてなされるもので、最も純粋な内容は「質疑応答」である。

(イ)イザナキの命問曰「汝が身は如何(いかに)か成れる」

イザナミの命答白「吾が身は成り成りて成り合はざる処一処あり」（古事記上）

(ロ)仁徳天皇「倭の国に雁卵(たむ)生と聞くや」

建内宿禰「倭の国に雁卵生と未だ聞かず」（仁徳記歌謡）

(イ)の如く、疑問副詞で問われればその答は説明のために複雑長文化するが、(ロ)の如く、疑問の助詞の場合は、ふつうその答はイエス（「諾(うな)」「善(よし)」など）か、ノー（いな「不欲・不聴・不許」）でこと足りることであった。

ところが、万葉集の「問答」の部立をみると、右のような単純な質疑応答に限らず、命令はもちろん、相手との関係における自己の意志・詠嘆・願望などを以て訴える形式をもっている。

(イ)紫は灰さすものそ海石榴市(つばきち)の八十(やそ)の街(ちまた)に逢へる子や誰　（巻十二、三一〇一）

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行き人を誰と知りてか　（同、三一〇二）

(ニ)明日よりは恋ひつつもあらむ今夕だにはやく初夜(よひ)より紐解け我妹　（同、三一一九）

今更に寐めや我背子新た夜の全夜(ひとよ)もおちず夢に見えこそ　（同、三一二〇）

(ホ)かくだにも妹を待ちなむさ夜ふけて出来し月の傾くまでに　（巻十一、二八二〇）

木の間より移ろふ月の影を惜しみたちもとほるにさ夜ふけにけり　（同、二八二一）

(ヘ)ねもころに思ふ吾妹を人言の繁きによりてよどむ頃かも　（巻十二、三一〇九）

人言の繁くしあらば君も吾も絶えむと云ひて逢ひしものかも　（同、三一一〇）

(ト)雷神のしまし動しさし曇り雨も零らぬか君を留めむ　（同、二五一三）
　雷神のしまし動し零らずとも吾は留らむ妹し留めば　（同、二五一四）

右の諸例は集中に「問答（歌）」と見出しを立てている中のもので、傍線部は、(ハ)疑問(ニ)命令(ホ)意志(ヘ)詠嘆(ト)願望の形式をもつ。かくして、広義の「問答」は、実は「対話」に他ならないのであって、人間の言語生活というものは、一人の表現者が一人の受容者に、呼掛け、要求し、願望し、命令し、勧誘し、依頼し、問い、訴える必要があってなされるものだからである。

いったい、万葉集の歌は、確かに歌なのではあるが、右のような訴えの内容をもつ表現にあっては、技巧以前の直接的な表白がなされるので、日常の口頭言語の性質を帯びているものが少なくない。それをかりに「ただごとのような歌」と呼ぶと、

大殿の、この廻りの雪な踏みそね。数々も降らぬ雪そ。山のみに降りし雪そ。ゆめ寄るな。人やな踏みそね。雪は。（巻十九、四二二七　三方沙弥）

浪高し。いかに楫取。水鳥の浮寝やすべき。なほや漕ぐべき。（巻七、一二三五）

石麻呂に吾物申す、「夏やせによしといふ物そ。むなぎ捕り食せ。」（巻十六、三八五三　大伴家持）

の如きは、右のように句読点をうつと、口頭言語の口吻が蘇ってくるであろう。このような、ただごとを思わせる歌は案外に多いから資料として役立つのである。「道が危いから靴をはいて行け」（巻十四、三三九九）とか、「月がよいから遊びに行こう」（巻四、五七一）とか、恋人の来訪をとがめられたら「風と答えよう」（巻十一、二三六四）とか、待人を「山より出る月を待っているのです」と言いのがれをしたり（巻十三、三二七六）、環境と話題に応じて、対話は果しなく続けられ、繰返されていたのである。

(二)会話。これは一対多の関係においてなされるものであるが、今日のような「会話」の概念にあたる

ような例にはなかなか遭遇しない。強いて挙げれば

忘るやと物語りして（人ト話ナドシテ）心やり過ぐせど過ぎずなほ恋ひにけり　（巻十二、二八四五）

ぐらいのものであろうか。多人数でお互い談り合う場合も例が少なく、

人衆く集りて談論ひき。（播磨風土記、揖保郡、阿豆村）

がみられる程度である。しかし、少し見方を変えて、社交上のことば（挨拶）ということになると、あるいは広義の「会話」の中に入れてよかろう。

(イ)「誰そかれ」と問はば（巻十一、二五四五）「誰そかれ」と我をな問ひそ（巻十、二二四〇）「彼は誰れ」（巻二十、四三八四）

(ロ)夕星の夕になれば「いざ寝よ」と手を携はり（巻五、九〇四）「皆人を、寝よ」との鐘（巻四、六〇七、笠女郎）

(ハ)吾門に千鳥しば鳴く、「起きよ起きよ」（巻十六、三八七三）

(ニ)山城の筒木の宮に「ものまをす」あが兄の君は涙ぐましも（仁徳記歌謡）

(ホ)玉の如照らせる君を「内に」とまをせ（巻十一、二三五二）

(ヘ)「まさきく」と言ひてし物を白雲に立ちたなびくと聞くは悲しも（巻十七、三九五八　大伴家持）父母が頭かき撫で「幸くあれ」ていひし言葉ぜ忘れかねつる（巻二十、四三四六　防人、丈部稲麻呂）「好去くて早還り来」と（同、四三九八　大伴家持）「行矣」（神代紀下、天孫降臨）

右の諸例の括弧内は、文字通りの解でよいのだけれど、かなり挨拶的な感じがする。(イ)は薄暮・薄明の精霊の跳梁する時に、人影のある場合、それを見とがめる言葉であるが、後世「黄昏・薄明」の時間を指すようになった点から考えると、それが挨拶語ともなる可能性をもつ。(ロ)は今日の「おやすみ」、(ハ)は「おはよう」に相当させ得よう。(ニ)は訪問の際の「物申す」につながる（橋本前掲論文二六七ページ）。

(ホ)は家の中へ招じ入れる言葉。(ヘ)は離別・送別の辞で、先ずこのあたりが当時の挨拶語と認め得よう。「ご無事で」に当たる、「行矣・好去」の文字はシナ六朝以前および初唐の俗語で、日本語のサキク・マサキクにふさわしかった（小島憲之『上代日本文学と中国文学』中、八二七―八三〇ページ）。書記言語の挨拶語については後述（一の2、(一)参照）。

(一)′討議。これも一対多の関係においてなされるものだが、今日の「討論（デイスカッション）」の内容を万葉時代に求めることは、言霊思想から滅多に「言挙（ことあげ）」しなかったのだから無理な相談であろう。しかし、全く無いわけではなく、

神議（はか）りに議り（古事記上、天石屋戸）

口子臣、亦其の妹口比売、及奴理能美（ぬりのみ）三人議（はか）りて（仁徳記）

の二例ぐらいが「相談・協議」の意として考えることができる。

(二)独話・演説。これは一対衆の関係においてなされるもので、対話とか会話にみられるように、自由な態度で狭い場所でなされるのとは異って、かなり特殊な情況で広い場所が想定される。「独話・演説」などという見出しの通りなら、万葉時代には無いといった方がよい。しかし、似たようなものなら、

(イ)祝詞（のりと）・宣命（詔勅）

(ロ)役の民に令（のりごと）して曰ひしく（常陸風土記、行方郡）

(ハ)喩（さとす）し族歌（巻二十、四四六五　大伴家持）

などが考えられる。これらの場面は、上位の者が下位の大衆に対して通達が行われるもので、公的な晴（はれ）の性格をもつ。

2　文字言語による伝達の形態

(一)通信。一対一の場合として、ふつう手紙が考えられるが、和歌の贈答にも文字言語が想定されるものもある。

(イ)大伴淡等謹状

梧桐日本琴一面……(巻五、八一〇・八一一)……附二公使一聊以進耳　謹状不具

天平元年十月七日附レ使進上

謹通ニ　中衛高明閤下一　謹空

跪承二芳音一……房前謹状……(巻五、八一二)

十一月八日　附二置使大監一

謹通ニ(二所の)尊門(この頃の)記室一

(ロ)布多止己呂乃　己乃己呂乃　美美毛止乃加多知(御身許のかたち)　支〻多末へ尓(聞き給へに)　多天万都利阿久(春りあぐ)　之加毛与祢波(しかも米は)

夜末多波多万波須阿良牟(山田は賜はずあらむ)……(正倉院尺牘二通の中の一通、天平宝字六年正月以前)

(イ)天皇、八田若郎女に恋ひたまひて、御歌を賜ひ遣はしたまひき。(仁徳記)

(イ)は万葉集所収の、大伴旅人と藤原房前との書状で、漢文体で認められ、その間に和歌が挿入されているから、この贈答歌(巻五、八一〇・八一一、八一二)も当然文字で書かれていたわけである。さて、手紙文では今日でもそうだが、冒頭・末尾のきまり文句がある。これは一種の挨拶語ともいうべきもので、ここでは傍線の如き語が用いられており、他に「謹啓」「幸甚〻〻」「恐〻謹言」「死罪〻〻」などがある。また右の例でもわかるように、尊貴の名や語の前を一字空白にしたり、日付や署名の法などにもきまりがあった。万葉集には、他に山上憶良・吉田宜・大伴家持と池主らの書状が収録され、それらの文章には漢籍的教養の高さが現われている。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com